

名古屋 文化情報

2019
11・12
November / December

No. 389
NAGOYA
Cultural
Information

随想／下向 拓生(映画監督)

視点／「まいまい狂言会」がもたらした新しい風～伝統芸能公演をママさんの手で～

この人と…／真島 直子(現代美術作家)

いとしのサブカル／山本 尚史(「猫町倶楽部」アシスタント)



2019

11・12

November / December

Contents

名古屋市民文芸祭 小・中学生の部 受賞作品…………… 2

随想 フィクションと現実との境界線
下向 拓生(映画監督) …………… 3

視点
「まいまい狂言会」がもたらした新しい風
～伝統芸能公演をママさんの手で～…………… 4

この人と…
真島 直子(現代美術作家)…………… 6

ピックアップ 大須に30年ぶりに映画館復活…………… 10

いとしのサブカル
山本 尚史(「猫町倶楽部」アシスタント)…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
- 濱津清仁 (指揮者)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽおと代表)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座制作部長)

表紙

作品

樹としての記憶

(2019年/木、ダーマトグラフ/108×113cm
最大直径123cm 高さ60.5cm テーブル状作品)

テーブルを見ていたら複雑な^{もくめ}空目が枝のように広がっていることに気づいた。逆って描くと樹の内側から空を見上げたような絵になった。物たちの自然物だった過去を思う時、人も自然の一部であることを自覚できそうに思う。



撮影：福岡 栄

藤原 史江 (ふじわら ふみえ)

略歴

- 1976年 名古屋市生まれ
- 2000年 名古屋芸術大学 大学院造形専攻修了
- 2009年 Dアートフェスティバル 推薦出品
- 2017年 亀山トリエンナーレ 出品
- 2019年 第22回TARO賞展 観客投票3位

◆名古屋市長賞◆

「飛行機雲」

名古屋市立守山東中学校1年

寺西 知鶴

かぎりなく広い空の黒板に
たくさんの人をのせた飛行機雲の
チョークが線をひいてゆく

しばらくして

線はかなしそうに消えていった

みんなどこへ行ったんだろう

がらんとした空の黒板に

私は問いかける

「2018年 名古屋市民文芸祭」
(第六九回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
詩の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

随想

フィクションと現実との境界線


しもむかい たくみ
下向 拓生(映画監督)

愛知県生まれ。平成30年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞受賞。

《Filmography》

『N.O.A.』：第4回クォータースターコンテストグランプリ受賞。

『センターライン』：福岡インディペンデント映画祭2018グランプリ、
 科学技術映像祭特別奨励賞ほか受賞。

フィクションと現実とが混じり合う瞬間が好きだ。全てが“嘘”である映画の世界が、今我々が存在している世界と繋がったときのあのワクワク感。私が映画を作るとき、この感覚を大切にしている。

監督作『センターライン』では、“AI(人工知能)の感情を裁判で定義する”という虚構のストーリーが、“人間の感情とは何か?”と、現実世界の我々への問いかけとなる仕掛けを施している。また、本作は愛知県を舞台としたサイエンス・フィクションである。実在する地域を舞台として展開する作品は、「その出来事が実際にあったことかもしれない」と思わせてくれる。そんな心躍る一瞬を自ら体験したくて、私は映画を作っている。

“場所”というのは不思議なもので、それそのものは動かないのに、時とともに変わっていく。災害によって一変してしまう可能性さえあり、今見ている景色は永遠ではないことを痛感する。

私はとある都市が好きで、その場所をどうしても映画の中で描きたかった。建物、景色、空気感。制作時のその瞬間のそれらを映画に閉じ込め残しておきたい。映画を見る世界中の人たちに、このとき日本のこの場所にこんな街があ

るということを伝えたいと。その目標を達成すべく、その街のしかるべき機関にしかるべき手順を経て手続きをし、映画撮影に頻繁に使用されている施設の撮影許可を申請し、制作の準備を進める。しかし、残念ながら、撮影許可が下りることはなかった。理由は、無名で何らの実績もない私が制作する映画には公益性が無いと判断されたからである。

そんな中、「うちで撮影してください」と言ってくださる方々が現れる。愛知県一宮市の人たちだった。彼等の協力により、一宮市役所、一宮市博物館、墨会館と、とても美しい建築物をバックに、説得力のあるリアルなシーンを描くことができた。「私たちの街の景色を、素敵な映画の中で写してくれてありがとう」という言葉をいただいたそのとき、フィクションと現実が本当に混じり合った感覚を覚えた。現実が芸術の舞台になるのではなく、芸術が現実を彩るんだと。

この映画『センターライン』は、公開から1年半の間、国内15都府県、海外4カ国で上映され、2019年3月に私は、愛知県芸術文化選奨文化新人賞を受賞することとなった。これから私は、あの都市を芸術で彩ることができるのだろうか。私はまだまだ映画監督を辞められない。

「まいまい狂言会」がもたらした新しい風 ～伝統芸能公演をママさんの手で～

親子向けの伝統芸能公演として2007年にスタートした「まいまい狂言会」が先ごろ幕を閉じた。12年間にわたり奮闘したママさんたちの道のりを振り返り、代表の長谷川裕美子さんと、演者として協力してきた能楽狂言方泉流の14世野村又三郎さんにお話をうかがった。
(まとめ: 杵屋六春)

「これはこのあたりのものでござる」

名古屋能楽堂にこんな言葉が響き渡った。多くの狂言で登場人物が最初に発する「名のり」といわれる決まり文句である。

公演の結びとなった「第12回まいまい狂言会」(令和元年7月20日)を訪れた。観客の多くは、客席の背もたれに隠れてしまうような小さな子どもたち。能楽堂が普段とは違う雰囲気にもまれる狂言会である。

幕開けの演目は「附子(ぶす)」。附子とは毒薬のことである。主人は「そこから吹く風に当たっても死ぬほどの猛毒」という附子を太郎冠者と次郎冠者に預けて出かけてしまう。

ところが、どうしても見たくなくて、こわごわ附子の入った容器のふたを開けてしまう二人。すると中には毒ではなく、おいしそうな水飴が！二人はつまみ食いをして結局全部食べてしまった。困った二人は、主人の大切にしている掛け軸や茶碗を壊し、帰って来た主人に「死んでおわびをしよう」と附子を食べましたが死ぬません」と言い訳をする。風が吹いても死んでしまう猛毒である。劇中で「あおげ、あおげ」と扇を動かすと、客席の子どもたちも一緒になって「あおげ、あおげ」の合唱。

「やるまいぞ、やるまいぞ」

「許させられい、許させられい」

怒りながら太郎冠者と次郎冠者を追いかける主人のセリフで、会場は大爆笑のうちに幕を閉じた。

太郎冠者役の野村信朗さんは現在18歳、第1回まいまい狂言会の時はまだ小学1年生(6歳)で、観客の子どもたちと同世代だった。主人役を務めたのは、第1回公演と同じ年に生まれた信朗さんの妹のさよさんだ。



第12回まいまい狂言会「附子」

そもそも狂言とは

狂言とはそもそもどんな芸能なのか。「まいまい狂言会」では子ども向けの解説文を掲載した下敷きを作成し、こう紹介している。

奈良時代に伝わった「散楽」が室町時代に変化し、謡や舞は「能」になり、コミカルなセリフ劇は「狂言」として発展した。

少し補足をすれば、狂言には約650年の歴史があり、喜劇だけでジャンルを形成した演劇は世界でも珍しい。

観阿弥、世阿弥によって猿楽の能が大成された頃から、能と能の合間に演じられるようになった。室町時代末期から江戸時代初期にかけて定着し、能が江戸幕府の式楽となったのに伴い、狂言も固定化し、当時の言語や風俗のままに伝承されている。狂言は1957年、国の重要無形文化財に指定され、2008年には能とともにユネスコ無形文化遺産に登録された。

日本の伝統芸能のジャンルは幅広く、雅楽や歌舞伎、三味線音楽、箏曲、尺八など多岐にわたる。しかし、そのイメージは“難しい”“退屈”といった先入観が強く、なかなか公演に足を運んでもらえない。筆者も伝統芸能に携わる一人として、発信する難しさを痛感している。

ママ友からの言葉がきっかけに

「まいまい狂言会」は、ママさん仲間で運営する全国的にも大変珍しい公演だ。発足のきっかけは、野村信朗さんの3歳の初舞台を見に来た幼稚園のママ友の間で交わされたこんな会話だった。

「どうして子どもが出演する公演なのに、同じ世代の子どもたちに見てもらえないの？」

能や狂言、歌舞伎などの公演を子どもたちが鑑賞できる機会は減多にない。かくいう筆者も長唄実演家の一人だが、長唄演奏会に大勢の子どもが来場する光景は見たことがない。

そこに着目したママさんたちが、自分たちで公演ができないものかと、名古屋を拠点に活動する狂言方の野村又三郎家に協力を仰ぎ「まいまい狂言会」を立ち上げたのだ。

今でこそ子ども向けのコンサートや演劇は当たり前だが、当時はほとんどなく、まして狂言は伝統芸能だけにハードルが高かった。

難しい伝統芸能のイメージを払拭し、子どもたちに親しんでもらえるように知恵を絞った。出演者は同世代の子方を中心に、演目は未就学児にもわかりやすい作品にした。

能楽堂の会議室には託児所を設け、乳児を預かってもらえるようにした。さらに子ども向けの狂言ハウツー下敷きを作成し、ロビーでグッズや子ども向けの飲み物を販売した。

ママさんならではの発想で公



信朗さんと父親の又三郎さん

演を毎年続けてきた。最初は集客面での苦労があったようだが、一般の子どもたちがワークショップに参加し、能楽堂の舞台上に立てる企画では、実技に熱中する子どもたちが増え、毎年応募する子どもも出てくるようになった。

ママさんたちは取材の中で、次のように話してくれた。

——「まいまい狂言会」をお手伝いしなかったら出会わなかった、一生の友人ができました。みんなが適材適所で、得意分野をこなしています。チラシをデザインする人もいれば、広告をお願いする人、集客のため奔走する人、助成金の書類を作成して申請する人もいます。——

そんなママさんのパワーとチームワークが、この公演の原動力だったと感じる。旗揚げメンバーのママたちが新メンバーを積極的に加えてきたことで、アイデアが増え、マンネリ化防止にもつながったことも人気公演に成長した要因といえる。



さよさんの初舞台「靉猿」

本物を見る目が未来の観客を育てる

日本の伝統芸能や本物を見ることが、幼少期の子どもたちにとっていかに大切なことか。そうした体験がきっかけとなり、狂言や日本舞踊などの伝統芸能が生活の中で特別なものではなく普通にあるものになってほしい。それが未来の伝統芸能の観客につながっていくのだと、ママたちは信じる。



来場者にうちわを配るさよさんとママさん達

「まいまい狂言会」代表の長谷川裕美子さんはこう振り返った。

——又三郎先生、信朗さん、さよさん、そして又三郎先生の奥さまの愛子さん。12年間、野村家の皆さんと交流させていただいたことが私にとっての一番の宝物です。皆さんとのかかわりの中で、日本的な大家族の親子関係の在り方を考えさせられたりもしました。一つの目標(家業)に向けて、力を合わせる家族関係の苦しさや厳しさ、今の時代に失いかけた美しさがあるとも感じました。

自分自身の生き方も重ね合わせて、舞台上で表現されるものだけではなく、家族の形も守り伝えるべき文化であると思いました。わが家では、家族の会話の中に狂言を中心にした“日本文化”というジャンルができました。

小学生のころに狂言に出会った息子は、社会人になった今も又三郎さんのお稽古に通わせていただき、今の社会で



ワークショップの風景より①

は学べない関係性を学ばせていただいています。

舞台上の姿だけではなく、一昔前には普通に暮らしの中に息づいていた伝統芸能や、日

本人が昔から大切にしてきたことを学ぶ貴重な機会をいただきました。私自身たくさんのことを学ばせていただいた12年でした。

振り返れば、メンバーそれぞれの子どもたちも成長し、生活環境も変化し、メンバー同士の関係性も少しずつ変化しながら、それでも夏の大きな舞台に向けて、何とかやってこられたのも、野村家と愛子さんという大きな中心軸があったからこそ。

これからも、自分の暮らしの中に持ち帰り、本物を次世代に伝える活動がしたい。日本文化や伝統芸能の世界に一人でも多くの方が思いを寄せてくださるよう微力ながら続けていこうと考えています——



ワークショップの風景より②

演者として「まいまい狂言会」に協力してきた又三郎さんは、次のように感想を寄せてくれた。

——“子連れママのための”という趣旨に、強い意義を感じました。素人のママたちが始めた公演なので、とりあえず1回2回は勢いで、3年続けば御の字と思っていました。

毎回「どうしたら子どもたちが喜んでくれるのか、楽しんでくれるのか」と企画・運営会議を続けてこられたママさん方には、本当に脱帽です。ママさん同士が一つの目標に向かって、和気あいあいと準備を進め、率先して運営に携わっていた光景をお子さん達が目の当たりにすることは、真の意味の“教育”であると思いました。

公演、講座、グッズ作成や販売などを実現するフットワークや行動力の原点が、純粋に「子ども達の笑顔を見たい」の一心で行われたことなど見習うべき点も多いと思います。むしろ計算や打算を抜きに続けられたからこそ「親子で本物」が、チラシを手にとった方々の心に響いて、観客動員や公演の継続につながったのだと思います。ここで一区切りをされて、また次の子育て世代のママさんたちに“先駆者”としてご指導頂ければと思います——



第12回公演のスタッフ

古典芸能の可能性を広げたこの公演は、今年で一旦幕を閉じた。芸どころ名古屋から親しみやすい公演を発信する足がかりとして、未来の観客を育て、伝統芸能を盛り上げていくことにつながったのではないだろうか。「まいまい狂言会」は我々世代の伝統芸能演者たちをそんな気持ちにさせる清々しい公演だった。

この人と...



現代美術作家

まじま なおこ

真島直子さん

地獄と極楽の狭間で

2018年開催の『真島直子 地ごく楽』展(名古屋市美術館、足利市美術館)は多くの来場者を魅了し、その成果も含めた評価により真島は平成30年度愛知県芸術文化選奨文化賞(現代美術部門)を受賞した。同展図録所収の作家インタビューと解説は現時点における真島直子に関する最も信頼できる資料である。本稿では図録との重複をできるだけ避け、真島の人物交流と美術以外の活動に重きをおいて真島作品理解の一助としたい。

(文中敬称略)

(まとめ：森本悟郎)

父建三とその友人たち

真島直子は1944年名古屋市生まれ。最初にして最大の影響を受けたのはおそらく父建三からであり、その友人たちの存在も大きかったであろう。戦前から福沢一郎の美術研究所で学んだ建三は、真島によればフランスかぶれで、毎日朝食はオートミール。味噌汁が出たことはないという。その父は戦後すぐの50年代に妻子を残して1年余、単身渡仏。シュルレアリストに慣れ、「パンより思想だ」と聞かされていた真島は子ども心に思想を持たなきゃ絵描きだとはいえないと信じていた。長じてからも父から「絵さえ描いていれば絵描きになれると思ったら大間違いだぞ」などといわれていたという。

真島の家には針生一郎や三木多聞といった評論家や駒井哲郎、北川民次、大口登、安藤幹衛など建三の仲間の画家たちが訪れ、そんな来客たちの議論や大喧嘩を幼い頃から目のあたりにすることで、彼らの反骨精神に驚かされた。父の年長の友人岡本太郎から「役に立つことをするな。役に立たないものを作らなかつたら芸術家じゃないんだよ。みんなが効率的なことに頭脳を使っているのは悲劇です」といわれたのは子どもの時だが銘記している。

建三は藝大進学に反対したものの、入学すると真島を連れて

画廊回りをした。そんな折に『三彩』編集長の太田三吉に「娘が藝大に入ってね」と建三がいうと、「そりゃあもうダメだ、入った途端お前は芸術家にはなれないよ」「藝大に行きました、それだけで芸術家になる資格がない」といわれた。当時、これは大変だと思ったが、今思えば太田は本当に美術を愛している人であり、「ぶち壊しても人と違うものを見せて行かなくてははいけない」ということを教わった。



アトリエ前で父健三と直子

学生時代の師と友人

愛知県立旭丘高校美術科では、ともに非常勤だが日本画家の中村正義と徳川美術館館長の熊沢五六が印象に残った。わけても熊沢の授業はエロティックな話も遠慮せず、「おかげでいかがわしい言葉をいっぱい覚えた」。

最初の東京藝術大学入試に失敗し歯医者で働くも、もう一度受験したいと、すいどうばた研究所の冬期講習に行



山口薫教授から90点を与えられた作品

く。そこで出会ったのが^{つづきや}続谷奈津子。続谷の教養は文学、哲学、心理学からフェルディナン・ド・ソシュールの言語学・記号学に及んだ。高校ではサルトルの実存主義ぐらいという真島は驚くばかりだった。真島は東京藝大、続谷は多摩美術大学に進学し、交流は続く。続谷に教わりたくて上野毛の多摩美にはよく遊びに行き、そこで続谷のゼミ教師で文芸評論家の奥野健男を紹介された。藝大には全くいないタイプの先生で、以後話す機会を何度ももち飲み会にも参加した。続谷からはたくさん本を借り、都内の実家では食事まで馳走された。親交は続谷が幼い子を残して40代で亡くなるまで続いた。

東京藝大ではともに解剖学の中尾喜保と西田正秋が変わり者で、印象に残っている。油画科教授の山口薫とは医務室で顔なじみとなり、3年になる時、研究室に来ないかと誘われた。山口には行きつけの飲み屋に案内されたり、群馬の実家に連れて行かれたり、自宅に泊めて貰ったり、課題作品に90点という高評価を与えられたりと、いささか破格に扱われた。ある日、研究室の副手を通じて入院中の山口に呼び出され、病室で山口から水彩画を見せられた。それがおそろく山口薫の絶筆だった。真島が藝大を卒業して間もなく、山口は死去。山口からは「作品を作ることやめなさい」と頻りにいわれていたという。

「卒業したときは自分が何をしたらいいのか判らなかつた。学校へ行けばアトリエがあるのに、いきなりアトリエがない。アトリエで描かなきゃならないという単純な発想はすぐ打ち砕かれた。母から帰ってこいといわれたが、父が描いているところで一緒に描きたくないと思った」。とはいえ一人で住処を持つ経済力はなく、同級生のMと池袋にシェアして部屋を借りた。彼女とは大喧嘩したが親友だった。やがてMには恋人ができて部屋を出、結婚したのち40歳を前に焼身自殺している。

工藤哲巳との出会いと死別

「若いうちに本物を見なくちゃダメだ。プラプラしてるぐらいならヨーロッパで本物見てらっしゃい」と父にいわれ、お金も借りてヨーロッパ旅行に出る。’70年のことである。パリのカフェ、ラ・クーポールで工藤哲巳と出会っているが、その時は挨拶だけだったという。

’88年、アートフォーラム谷中のコーディネーターに就任すると、『東京藝術大学工藤哲巳研究室展 魂に発射』を開廊展として企画。工藤は前年、四半世紀ぶりにフランスから帰国し、藝大教授に就任したばかりだった。同展を機に3年間で4度、工藤と2人展を開催。’90年、工藤が結腸癌で入院すると病室に詰め、患者が寝ている間は読書と作品制作に費やした。その時工藤のベッドの下でタオルをボンドで固めて作ったのが、後の鯉の作品とはまったく形姿の異なる新巻鮭のような鯉の立体である。「あのときは鯉というよりも、命の代用みたいなものでした」（『真島直子 地ごく楽』展図録）。11月12日、真島が看取るなか工藤は息を引き取る。

「縁日」パリに行く

工藤死去後も真島は精力的に展覧会を開いているが、酷いアルコール依存状態でもあった。それを見かねた坂入尚文（真島の藝大の後輩。彫刻科卒業を目前に退学し、現在は鉛細工師。著書に『間道 見世物とテキヤの領域』（新宿書房/2006）。『真島直子 地ごく楽』展図録にも寄稿し、真島を最も近く知る人物）は真島を北海道のテキヤの商の^{あきない}旅へと連れ出す。そこで真島が^{いれずみ}実見し実感したのは彼らが「みんな真面目で、一生懸命その日稼ぎをしている」姿であり、身体に入れた文身の美しさだった。が、折しもヤクザ新法（「暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律」。略称「暴対法」）によって全国からテキヤが排除される機運にあった。

真島は何とか彼らを応援し、存在を認知させたいと考え、パリで見せることを坂入に提案した。「テキヤは全部自分が受け持つからやりましょう」と坂入も同意した。

文化人類学者・山口昌男、詩人・大岡信、美術評論家・田中幸人、比較文学者・芳賀徹など錚々たる人士が発起人を引き受けた。彼らの紹介も奏効し、資金はセゾン文化財団や笹川日仏財団などから調達できた。渡航はAOMフランス航空が請け負った。真島は2年間、準備のため毎月フランスに通い、当時パリ市長だったジャック・シラクにも会った。若い頃パリで世話になった、^{オフニ}パリの新聞『Ovni』（元パリ在住日本人向けミニコミ誌『いりふね・でふね』）のベルナール・ペローは縁日の時も手伝ってくれた。かくして’94年6月、総勢約60人でパリに出かけた。一行の中には「テキヤとしても通用しそうな顔をしている」画家・美濃瓢吾、学芸員・土方明司（現平塚市美術館館長代理）ら数

人の美術畑も入っていた。商売道具の三寸（屋台）は大荷物だがエアカーゴで運んだ。

真島が実行委員長を務めた『縁日風景 '94』はバスターミナルで3日間開催した。テキヤは飛行機も外国も初めてという人ばかりで、水も買えない、食事も我儘をいう、行儀が悪い、と大変だったが「彼らを応援したかったから一生懸命やりましたよ」。真島には刺激的で充実した日々だったようで、「私も勉強になったし、酒飲んでるばかりじゃダメだ、ということがその時判った」。

この催しを機に、「Ennichi」という言葉はフランスで「Koban」と同じように定着したという。



立体作品の制作

写真：阿部シゲル

真島直子をめぐる人びと

『縁日風景』を応援した山口昌男とは工藤哲巳のパリ時代に知己を得た。以後、真島の展覧会には繁く足を運び、中京大学C・スクエアの『真島直子展「地ゴク楽」』ではリーフレットへ寄稿しオープニングにも姿を現した。学長を務めていた札幌大学にもこんなギャラリーが欲しいと後日学長室にギャラリーを作り、大学当局と悶着を起こしたこともあった。親交は'13年に山口が亡くなるまで続いた。大岡信は日本文学研究者のフランス人アンドレ・デルティユの紹介によるもので、大岡は工藤哲巳とも親しかった。デルティユからは真島が若い頃に加藤周一を紹介され親しく話す機会を得ている。さらに彼の師で日本美術史研究者のフランソワ・ベルティエも紹介されており、真島の流暢なフランス語はその親交の賜物である。ユーゴスラヴィア人の言語学者・アンドレイ・ベケシュ（リュブリャナ大学名誉教授、元筑波大学人文社会系教授）ともデルティユを通じて交友を持った。

ニキ・ド・サンファルの作品のみを展示したニキ美術館（'11年閉館）館長の増田静江は貴重なサポーターであり、夫の通二（元パルコ会長）からも真島は愛されていた。'80年代の終わり頃、増田通二からドイツ文学者の種村季弘を紹介され、「これだけい

ろんな抽出をお持ちの方はいませんよ。真島さんもぜひ種村さん

の本を読んでみてください」と通二にいわれた。後に種村も自ら企画した展覧会に真島を起用するなど互いに気心の通じ合う仲間だった。

当然ながら親交をもった美術家や美術関係者は数多い。なかでも建三の師である深沢一郎、研究所時代の建三の友人山下菊二には小さい時から可愛がられた。岡本太郎、太田三吉、山口薫、工藤哲巳はすでに記した。大切な友人たちとして美濃瓢吾とその師平賀敬、秋山祐徳太子、高校の先輩岩田信市、藝大後輩の人形作家・大島和代と絵本挿絵画家の山内ふじ江たちを挙げておこう。

交友歴からは真島が誰からも愛される存在であることが判る。好感が持たれる理由は、ひとたび親しくことばを交わせばおそらく誰でも寸時に気づくだろう。だがデルティユ、ベケシュ、美濃、秋山、大島、山内をのぞきすでに亡い。

見世物学会設立へ

'97年にC・スクエアで個展を開くに際して、真島から「見世物に『地獄極楽』というのがありますね。それを展覧会タイトルにしたい」と要望された。理由は「自分の作品には地獄の苦しみも極楽の喜びもある」「地獄も極楽も自分の中では地続きだ」とのことだった。「それならいっそ地獄と極楽をくっつけて『地ゴク楽』としたら」と提案してみたのが、今日まで何度も展覧会タイトルに使われ作品にも使われている名称の始まりである。その時この作家は地獄と極楽が地続きだと思っているだけでなく、美術展と見世物も地続きだと考えているのではないかと考えた。それを今回訊ねてみると、果たしてその通りだという。



鉛筆画の制作

写真：阿部シゲル

この展覧会の話し合いの前、真島は山口昌男の誘いで映画を観た。北村皆雄監督『見世物小屋』で、人間ポンプ・安田里美のドキュメンタリーである。映画が終わると、山口が「実は歌舞伎研究者の郡司正勝から遺言のように頼まれていることがある。歌舞伎の原点は見世物であるということで、『見世物学会』を作りたい」といい、同席していた坂入尚文にも「骨折れるか?」と訊ねた。その場にはテキヤの親分・西村太吉も来ており、結局



「アジア・アート・ビエンナーレ グランプリを祝う会」
(左から)増田静江、(一人おいて)真島直子、山口昌男、増田通二

やることになった。『地ゴク楽』展以前に、すでに真島の中では美術展と見世物は地続きだったのである。

見世物学会の詳細はウェブサイト〈<https://www.misemonogakkai.com>〉に譲るが、要は研究者と見世物興行界による産学協同の実証的研究会である。設立には山口昌男、種村季弘、俳優の小沢昭一、藤平興行、大寅興行が中心的役割を担い、坂入尚文は設立以来の事務局長。山口から「真島さんも絵ばかり描いてるんじゃないかって、違うことをやれ」といわれて事務局を担当。やっているうちにだんだん見世物の世界が面白くなってきたという。その原因は何だろうかと思っていたが、最近ほぼその答えが判ってきた。

「ほかに何もできない、勤めることもできない人たちが生きるためにやっている。昔なら国籍がない、自分の親も年齢も知らない、身体に障害がある、そういう人たちが見世物で働いていたわけです。安田里美さんは先天性色素欠乏症で、それも差別される原因だった。そこで考え出したのが口から火を吹く、金魚を飲み込んで釣り針で釣るなんていう人間ポンプ。これは生きるための知恵です。そこから〈生きるとは何ぞや〉ということをも身をもって知らせてくれる。それはアーティストにとって非常に大事なことです。ということで私は見世物学会を大事にしている」

「彼らは認知もされなければ、賞も何も貰えない。けれども必死にやっている。それを見ているだけで〈人間はこうあるべきだ〉という基本を感じさせてくれる。そうするといい加減な美術はすぐ見分けられちゃう。見世物屋の足下にも及ばないのがいっぱいいるんです」

浪人時代に続谷を通じて知的な世界への扉が開かれ、後年それは知識人・文化人たちとの交友を通じて磨かれ、『縁日風景 '94』のプロデュースと見世物学会への参加は、より地に足の着いた知性へと変貌させたことだろう。真島のテキヤや見世物の世界に寄り添う姿勢には、社会的排除という不条理への怒りと、認知されなくても真摯に生きる人々への共感が見て取れるのである。

クリシェ（常套句）で制作しない

真島が油絵を描きはじめたのは小学生からで、これは父親が画家という特別な環境だったからだ。終戦間もない真島の時代はもとより、今日でも油絵画材は高価である。'70年代末頃に油絵を放棄しているが、真島がその理由の第一に挙げているのはコストがかかることである。だがもっと大きな理由は長く油絵に親しみ訓練を積んだ結果、それが常套的な表現に見えてきたことだ。「人が見たこともないようなものを作る」ことをこそ願っていた作家にとって、これはむしろ幸いな結果をもたらした。

「6畳ひと間で置場もない、絵を描く場所もないという環境に追いやられ、それで会場なら作れる」というので始めたのが会場空間をいっぱいに使ったインスタレーションである。「切羽詰まって」が動機だが、そんな状況でも作ることを表現することを止められないところにこの作家最大の美質がある。女性の同級生がほとんど制作をやめても「私はやめられない。その代わりほかには何もできない。不安症なの。何かいつもやってないと生きてる気がしない」。

'80年代半ばあたりからインスタレーションは次第にオブジェクト化し始め、'90年代になるとさまざまな独立したオブジェによる構成へと変化する。これを真島の個人史と重ね合わせた解釈もあろうが、真島直子という作家の本性を考えれば手慣れることを拒否するゆえの変化と考えたい。

「いつでも、どんなところでも作る」という姿勢は工藤の病室での鯉もその一例だが、立体を作る時に木工ボンドが硬化するまでの時間にドローイングを描き始める。それはやがて長大な作品となり、真島は鉛筆ドローイング作品で第10回バングラデシュ・アジア・アート・ビエンナーレのグランプリを受賞する。

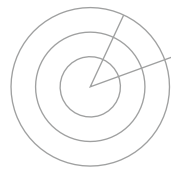
現在真島は鉛筆ドローイングを描いていない。足の怪我が原因で、膝をつけて座ることができないからだ。代わって油絵が復活した。人工股関節になってから何時間でも立っていられるのだという。鉛筆ドローイングが描けなくなったから油絵なのか？ いや、クリシェで描かない自信をもったからこそその復活であろう。



最新作の油画にとり組む

写真：阿部シゲル

ピックアップ



大須に30年ぶりに映画館復活

大須商店街の賑わいには格別のものがある。訪れるのは老若男女、国籍もさまざま。確かに、古着屋あり、雑貨屋あり、世界の国々の食べ物屋ありで、人ごみにまぎれてぶらぶら歩くだけでも楽しい。

大須の歴史は古い。1612（慶長17）年に、家康の命により岐阜県羽島市桑原町大須にあった真福寺（大須観音）を現在地に移転。周辺地域は大須観音の門前町として発展。寺だけでなく、芝居小屋や遊郭もあり、芝居や芸事を奨励した七代藩主宗春の時代には、大いに賑わった。

名古屋で初めての映画館が生まれたのも大須だった。1908（明治41）年1月、大須観音境内に文明館が開館。東京、大阪について日本で3番目だった。その後、芝居小屋が映画館に変わったりしてその数はどんどん増え、昭和初期には23館にもなった。しかし、太平洋戦争の空襲ですべて焼けてしまう。戦後、14館が再建されるが、昭和30年代後半からはテレビがブームとなり映画館は閉館を余儀なくされていく。1988（昭和63）年12月、成人映画の上映館としてがんばっていた名画座が閉館して、大須に映画館はなくなった。

それからおよそ30年、2019年3月に大須シネマが誕生した。NPO法人が運営する全42席のミニシアターだ。何が観られるのかとウェブサイトで上映作品を確認して少し驚いた。午前中1本、午後から3本とすべて違う映画を上映している。それも、懐かしの洋画あり、アニメあり、サスペンスあり、日本映画ありと多彩。ちなみに9月のある日のプログラムは、11時から12時「ショートショート」、12時30分から「ひつじのショー バック・トゥ・ザ・ホーム」、14時10分から「先生と迷い猫」、16時20分から「恐怖分子」、18時30分から「悪魔のいけにえ レザーフェイス一家の逆襲」。大須商店街を訪れる老若男女すべてを対象にしているようだ。

イッセー尾形が主演している「先生と迷い猫」を観ることにして、久しぶりに大須へ。万松寺通りを上前津に向



万松寺通りの入口



上映中の作品を紹介した看板

かって進み、大須ベーカリーの角を北に曲がると、世界の山ちゃんの看板が目に入る。世界の山ちゃん大須シネマ店だ。ここで飲み物や食べ物を調達すれば、館内で飲んだり食べたりできる仕組みだ。よく見ると、道路上に上映中の作品の案内が出ている。入場料を払うと、プラスチックの黄色くてまいる札を渡され、上映開始の10分前にホール横の待合室に来てくださいと言われた。この待合室には世界の山ちゃんを利用するだけの人もいる。時間になると、黄色い札をスタッフに渡して入場。42席という適度な空間で、ゆったり鑑賞することができた。今や映画はスマートフォンやパソコンで観られる時代だが、大きなスクリーンの醍醐味は何ものにも代えがたい。それに、映画の内容によっては、観客同士で語り合えるかもしれない。

30年の空白を経て、映画館を復活させた大須シネマはガラス張りでスマートな外観に似合わず、子どもからお年寄りまでの全世代を意識して、上映作品はまさに「ごった煮」。見逃した名作や思い出の映画に出会える可能性も高い。2015年に再オープンした大須演芸場とともに大衆文化の中心となるよう、応援していきたい。

（山本 直子）

※参考サイト「消えた映画館の記憶」



ガラス張りでスマートな大須シネマ

いとしの サブカル

1冊の本から パーティが始まる! 新しい「読書会」について

「猫町倶楽部」アシスタント

やまもと なおふみ

山本 尚史

名古屋市在住。読書会サークル「猫町倶楽部」の名古屋アシスタントを務める。イベントの企画・設営の他、月に1度行われる読書会参加者のためのクラブイベント「コアタイムリポート」を開催。

突然ですがあなたは「読書会」と聞いて何を連想しますか？ みんなで集まって本を読む？ それぞれが好きな本を持ち寄って紹介する？

もちろんそれらも確かに「読書会」ですが、今回お話しさせていただくのは別の形、「全員であらかじめ同じ本を読了してきてその内容について語り合う」読書会のことです。

「本は一人で楽しむもの」「本の感想を人に言うなんて恥ずかしい」と思われる方もいるかもしれません。それもごもっともです。

でも、考えてみてください。子どもの頃から本が好きだったあなたが大人になって暮らしていく中で、職場や友人に本の話ができる人はいますか？ ましてや同じ本を読んでいて、そのことを共有できるなんて奇跡的な確率ではないですか？ 読書会ではなんと、あなたが読んだ本を他の参加者も読了してきているのです！

6～8人でテーブルを囲み、本を読んで理解したことや感じたことを話し、他の参加者の話を聞き、自分一人では気付けなかったことを理解する。それだけでなく、なんとなく感じてはいたけれど言葉にできなかったモヤモヤも、アウトプットすることで形に出来ることもあります。

申し遅れましたが、私はここ名古屋が発祥の読書会サークル『猫町倶楽部』でアシスタントスタッフをしている山本と申します。

猫町倶楽部では名古屋だけでも月に5～6回、東京や大阪などの他地域も合わせると毎月20回前後の読書会を開催しています。扱う本は古典から現代、文学からビジネス書・哲学・アートまで多岐に渡りますが、大枠としては「名前は知られているけどなかなか手に取る機会のない」基礎教養的な作品など、少し読了難度の高い本が多いです（とはいえ現代のエンタメ作品を扱うこともあります）。

こう書くとハードルが高く思われるかもしれませんが、けて知識や正しさをぶつけあう高尚な会ではありません。「他人の意見を否定しないこと」がマナーであり、たった一つのルールです。読書はヘビーに、読書会はライトに楽しく意見交換を行っています。参加者は二十代後半から三十代の方が中心ですが、老若男女を問わない生涯学習の場でもありたいと考えています。

また、猫町倶楽部の読書会には他で開催されている読書会とはおそらく少し違った思想があります。それは「読書会とはパーティでもある」ということです。読書を通じて新しい世界や人と出会い、交流し、メイン・サブのジャンルを問わずあらゆるカルチャーを横断的かつ教養的に楽しみながら身につけ、新しい扉を開いて人生を豊かにしていくこと。それが可能な会であることを信じて運営しています。

通常の読書会の他にも、本と同じように課題映画を観てきて感想を語り合う会や、美術館でのレクチャー、最近ではクラブイベントや、愛知県芸術劇場とコラボしてのコンテンポラリーダンスのイベントなども行いました。

あなたも猫町倶楽部の読書会で、新しい世界の扉を開いてみませんか？





やっとかめ文化祭2019

時をめぐり、文化を旅する、まちの祭典。

古典の日記念公演

～伝統は時代を超えて～ 狂言「長光」 ろうそく能「鶴亀」

日時：11月1日(金)18:00
 料金：一般3,000円 学生1,500円【全自由席】
 会場：名古屋能楽堂 Pコード：496-325

新世代の奏者たち ～受け継がれる津軽三味線の響き～

日時：11月10日(日)14:00
 料金：一般3,000円 学生1,500円【全自由席】
 会場：名古屋市芸術創造センター Pコード：158-949

名古屋三曲連盟が贈る三曲コンサート

～未来へつなぐ日本の音色～
 日時：11月17日(日)14:00
 料金：一般3,000円 学生1,500円【全自由席】
 会場：名古屋市青少年文化センター アートピアホール Pコード：158-958

芸どころ名古屋舞台 新時代を祝う継承の舞台

チケット取扱い

- 名古屋市文化振興事業団チケットガイド
 TEL：052-249-9387(平日9:00～17:00/郵送可)
 そのほか事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。
- チケットぴあ
 TEL：0570-02-9999
 ※セブンイレブン、中日新聞販売店でもお求めいただけます。



「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

右記の質問にご回答いただき、FAX、Emailまたは郵送にて**12月16日(月)【必着】**までにお送りください。ご回答いただいた方の中から**抽選で20名様に名古屋市文化振興事業団の主催事業鑑賞補助券500円分をプレゼント**いたします。
 ※当選の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

- 内容について、どう思われますか。
 ①よい ②まあよい ③あまりよくない ④よくない
- 「なごや文化情報」の中で関心を持つ記事はなんですか。(複数回答可)
 ①表紙 ②名古屋市民文芸祭受賞作品 ③随想
 ④視点 ⑤この人と ⑥この人と…ズームアップ(1・2月号のみ掲載)
 ⑦ピックアップ ⑧いとしのサブカル ⑨1年をふりかえって(3・4月号のみ掲載)
- 今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。
- 今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題や、コーナーがありましたら、ご記入ください。
- ご回答いただいた方の①お名前 ②性別 ③年代(30代など) ④郵便番号 ⑤ご住所 ⑥電話番号

【宛て先】〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8階
 (公財)名古屋市文化振興事業団・文化情報アンケート係
 FAX:(052)249-9386 Email:tomo@bunka758.or.jp

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー アートディレクター 印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
 感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。



舞台音響・映像設備
 設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
 〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98
 TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

舞台VTR映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン.ビデオ.システム**
 TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
 ◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・舞踊・音楽公演・ホール、DM等にて配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒461-0004 愛知県名古屋市中区葵2-11-22 アバンテージュ葵305
 TEL(052)508-5095 FAX(052)508-5097
 URL <http://www.mane-pro.com>

業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作
 ③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営

